

中国史の中で、僕は三国の時代がとりわけ好きだ。『三国志』や『三国演義』、そのほか様々な古典文献が多彩で神秘的な三国の歴史を伝えている。そして今日の社会を見ると、僕にはこの三国の時代が再演されているかのように思われてならないのだ。

三国時代の魏、蜀、呉は、現在のアジアの枠組みにおける中国、韓国、日本に実によく似ている。三国の地理的条件に照らし合わせてみると、今日の中国、韓国、日本が不思議と重なるのだ。水域に面した呉は水上兵力に秀で、強大な水上軍を擁し、一大勢力を誇っていた。日本も昔から同様の環境にあり、元の蒙古軍でさえ日本の地理的条件を前にして有効な策を持たず、二度にわたる攻撃も失敗に終わっている。

山国の蜀は、地勢に恵まれ、豊かな資源を有し、難攻不落の国として知られていた。これは現在の韓国の状況にそっくりだ。韓国もまた山がちな国であり、ソウルオリンピック開催以来、アジアNIESのうちで最も目覚ましい発展を遂げている。

最後に中国だが、中国の首都、北京が位置するのも、魏と同じく比較的平坦な平原の地だ。そしてかつての魏がそうであったように、中国もまた、広い国土、多数の人口、豊富な資源など、様々な面で他国を凌駕している。50年にわたる戦いの果てに、魏は他の二国を手中に収めたが、それも束の間、かつての家臣だった司馬一族によって、その勝利は篡奪されてしまう。このことは、今日のアジアの政治、文化、経済変革の予測不可能性を暗示しているかのようだ。

政治状況と戦乱の歴史を見ると、とくに1920年から1970年までの戦争の時代のアジアの政治的枠組みに、三国の姿が妙に重なる。偶然にも、三国の戦いも50年にしか満たないものだった。もちろん両者の結末は大きく異なるのだが、その政治構造の大枠を比較すると、そこには驚くほどの類似性を発見することができる。たとえば魏、蜀、呉は元来それぞれが統一された国家の形成を目指していたにもかかわらず、お互いが独自の道を歩む中で、別々の三つの国を形成していった。軍事力の集中と分散、そして中央権力の弱体化によって群雄割拠の状態となり、魏、蜀、呉の間で絶え間ない戦闘が繰り広げられた。途中、十数年間の短い平和な時代が訪れるものの、結局は長い戦乱の果てにひとつの国へと収束していく。しかしこれも真の結末ではなく、晋代に入ると中国は再び急速に分裂に向かっていく。

第二次世界大戦期のアジアに目を転じると、まず日本による中国への侵入とその失敗がある。そして1950年代に中国が朝鮮に対して行なった対米闘争支援は、のちの北朝鮮と韓国の政治、経済、軍事に多大な影響を及ぼすことになる。このように、政治、経済問題を武力によって解決しようとした時代の後に、十数年間の平和な時代が訪れるものの、今日僕たちの前には、文化的侵蝕と相互の影響という新たな問題が立ちだかっている。国と国との間の均衡が崩され、また再生される

手段として、政治および軍事的な侵略と、経済および文化的な影響のどちらがより危険なのだろうか。数年前からグローバル化に対する懸念が言われているが、今日の僕たちは自文化の喪失と揺らぎの感覚にとらわれている。このような結末こそ、現代の「空城の計」と言えるのかも知れない。しかし、僕たちはなお、自分たちの行くべき道を見出せずにいる。

もうひとつ、三国について興味深いのは、中国、日本、韓国がそれぞれの形で三国を読解しているということだ。三国は中国だけの物語ではなく、日本と韓国の歴史の中にも深く浸透している。その読み方には無数のバリエーションがあり、出典の特定も不可能な形でアレンジがなされ、それが深く人びとの心に入り込み、流通している。たとえば十数年前に日本では『三国志』のマンガやアニメが大ヒットしたが、僕はそうした作品を見て困惑を覚えずにはいらなかった。これは一体、あの三国の物語なのか、あるいは日本の神話や伝説なのか、中国と日本のどちらがより真実に近いのだろうか、と。こうした微妙な差異を前にして、僕たちの歴史はもはや唯一正しいものではあり得ない。最近になって、韓国にもまた別の三国の読みがあることを知り、僕にとって何もかもが不確かなものとなった。歴史がひとつの像を結び得ないとき、僕たちの過去と現在は、僕たちとどのように関わってくるのだろうか？

たとえばこんな風に考えてみよう。僕たちの現在が、過去とは全く切り離されて在るのだとしたら、僕たちの現在と最も深い関わりを持つのは西洋の産業文明ということになる。ところで、現在の中国を少しだけ前まで遡ってみると、そこには清代の封建帝政がある。封建帝政と産業革命の間に直接的な関係はないかも知れないが、唯一関係があるとしたら、それは中国が封建帝政と産業革命の二重の被害者であったということだ。いや、こんなことを言い募ってみても、本展とはいささかの関係もないことなのかも知れない。しかし、こうした現象は美術の歴史の中でも起きていることなのだ。たとえば、いま僕たちが崇めてやまないコンテンツボラリー・アートも西洋文明の産物なのだが、中国は西洋産業革命の受益者であり被害者であるという二重のアイデンティティを持ちながらこれを受容したため、そこでは西洋文明に対する懐疑がつねに保たれてきた。だがこうした懐疑は、中国と西洋とのつながりを不可能にするものではない。それどころか、中国のコンテンツボラリー・アートは、西洋の支持を受けながら、着実に豊かなものとなり、いま最もエネルギッシュな勢力のひとつになっている。しかし、こうした成功を見るにつけ、僕は中国のコンテンツボラリー・アートとは一体何者なのかと問わずにはいられないのだ。

多くの試みの果てに、僕はコンテンツボラリー・アートが人間の情感に及ぼす負の影響について考えるようになった。中国では西洋式の理性

と狂気の中、疾風怒濤の勢いでコンテンポラリー・アートが創造され、いまや西洋さえもが彼らの血統を継ぐ非嫡出子を中国の地に探し求めてはならない状況になっている。

アジアの現状、そして中国、日本、韓国の関係については、本展における一部の作家の作品の中に、社会の直接的な反映を見ることができよう。しかし、より多くの実験と試行を通して浮かび上がるのは、社会の成長の異なりというべきものだ。それが経済、芸術、政治における態度の違いであれ、そのままの現状の違いであれ、それぞれの間には何らかの筋道と関連性が見出されるだろう。より深いレベルで社会を研究し、個人を見つめることによって、僕たちは自分たちの現実と、他者の現実との間の差異と共通性を一層はっきり認識できるはずである。

「アウト・ザ・ウィンドウ」—僕たちが与えたそのタイトルによって、本展は窓からの眺めのようにも、尽きせぬ天地のようにも見え始める。そこにあるのは、窓を通り抜ける風の感覚、窓を貫く光の視覚、そして互いに眺めやり、コミュニケーションを図ろうとする意図だ。なぜ僕たちは本展をともに企画し得たのだろう。本展の枠組みは、実に素早く、順調に決まったが、それはまるで、詩の中で味わう、窓を挟んで眺める大海の広大無辺を思わせた。だからこそ僕たちは、このタイトルをつけ、このタイトルを好んで止まないのだ。

これもまたそろ、西洋の影響を受けつつ、^{オリエンタル}東方的な意味合いを含んだ表現のひとつだと映るのやも知れない。しかし、最初の東西文化融合から戦争にいたる現実には、僕たちの中で、既に現実における融合不可能性の承認と、さらにそうした状況における現実の相互影響の認識に変換されている。本展に参加している韓国作家および日本作家の作品を通して、僕たちはこうした激烈な交わりと相互影響の結果を発見することになるだろう。それに対して中国作家の作品は、中国社会の現状とより深い関わりを持ち、彼らが肌で感じている現実の変化に対応するものが多し。^{オリエンタル}コンテンポラリー・アートの世界においては、^{オリエント}東方的なイメージから西洋の承認へ、そして改めて東方という概念を確認するまで、わずか5年の時が費やされたに過ぎない。しかし、そもそも実際の生活の中で、僕たちは既に50年の経験を積んでいる。1949年の中華人民共和国の成立から現在の教育状況にいたる流れを見れば、今日の僕たちがいかにして知識を獲得し、社会の中でいかなる形で生存してきたのかが分かる。もはや僕たちは単純に西洋を敵であるとか味方であるとか言うことはできなくなっているのだ。自分自身の文化的現実と生活の現実の中で、僕らは一体どのような思想を好み、どのような生活を求めているのかが、いま一度考えられなければならない。

芸術が魂を救うことはできないし、芸術が現実の代わりとなることも不可能だ。作家は冷静な態度を保ち、芸術を、現実の反映や現実への嘲笑に過ぎないものとして見ている。しかし、観衆も同じように冷静に見ているのだろうか？ まるでマトリックスの中で、機械や現実と戦う人間たちのように、いま僕たちはいったい何を求めているのだろうか？ それはあたかも窓を開け、そこに風や光を通そうとすることのようではないか。もし僕らが砂浜に降り立ち、直接大海を望むのならば、そしてもし国境も歴史も芸術もない世界に行けるのならば、神の創ったエデンの園に帰ることでもできるのだけれど。

註

三国の時代は、後漢末、群雄が覇を争う時期に始まる。魏、蜀、呉の三国が鼎立したことからその名で知られ、265年、魏に代わって晋が立ったことにより終結する。多くの歴史家は、190年に董卓が漢の献帝をともない洛陽からの遷都を強行したことを、三国時代の始まりと見なし、280年に晋が呉を滅ぼして天下を統一したことを、その終わりと見なし

(秋山珠子訳)

李振華 | リー・ジェンファ (インディペンデント・キュレーター、中国)

A New Version of the Three Kingdoms

Li Zhenhua

The Three Kingdoms era fascinates me, mostly because of the different versions of text, *San Guo Zhi* and *San Guo Yan Yi* to name but two, which document the events of that particularly colorful and interesting time in history. Full of mystery and intrigue, much of today's society has a lot in common with those exciting times.

The Three Kingdoms: Wei, Shu and Wu geographically resemble today's China, Korea and Japan. In history books, Wu is a country near water with a powerful navy. Up until the end of the Second World War, Japan was a powerful country near the sea with a formidable navy. Even the Mongolians during the Yuan Dynasty who built the largest geographical empire in history failed to defeat the Japanese naval fleet.

Shu's kingdom is surrounded by mountains, rich with natural resources and strategically situated for effective warfare. Korea's rocky terrain and successful hosting of the Olympic Games made it one of the most prosperous of Asia's Four Dragons.

The last of the Three Kingdoms is Wei. A parallel to China, Wei is described as a strong and powerful flatland with abundant resources and manpower.

The historical records of the Three Kingdom period state that after fifty years of fighting, a completely different entity, the Si Ma family, was able to rise up and conquer all three kingdoms and found an entirely new dynasty: Jin. Although the outcome of our modern-day Three Kingdoms is still unknown, the political, cultural and economic climate in which our three countries interact reflect a similar scenario of change and exchange between us that has parallels during this point in history.

I was surprised to realize that Asia's recent history and political climate from 1920-1970 was also, like the war between the Three Kingdoms, a span of fifty years. Politically, our recent events unfolded differently from the Three Kingdoms, but the familiar sense of instability and change remains. Although the Three Kingdoms aimed to integrate into a single country, Wei, Shu and Wu took individual paths and grew beyond the imperial Han government's control. The concentration and distribution of military power, along with the waning of centralized power brought about the age of rival warlords, and all the kingdoms fought constantly. Even during a span of ten years where they did not physically fight each other, they still continued to struggle until the Jin Dynasty emerged. However, even the reign of the Jin was fleeting and soon after the dynasty was established, the region was once again consumed in conflict and the land descended back

into a divided country.

During the Second World War, Japan sent troops to China but failed to invade the country. In the 1950s, China sent troops to Korea; an action which had a huge impact on the political, economical and military conditions in North and South Korea. Our military, political and economic game of power is a constantly shifting its scenario. Although the relationships have been peaceful for decades now, new issues of cultural erosion and mutual influence are being raised. Now, since we do not exert influence each other militarily, the power of influence shifts to culture. Certainly, this is healthier than warfare, but what is the objective? In this globalized environment, what are we losing from our own cultures while we absorb things from others? We really do not know what direction this will take us, but we cannot ignore the fact that the cross-pollination has changed our world.

I have recently discovered that Japan and Korea also have their versions of the Three Kingdom legends. Apparently this history is not just part of Chinese history, but also an integral part of Asian history. With Japanese *manga*, comic books and television cartoons that reinterpret different parts of the Three Kingdoms story, my own image of that period blurs. I find myself questioning whether what I believe to be history is actually Chinese or merely a legend from Japan. The truth became more oblivious when I learned that Korea also had a Three Kingdoms story. Does this phenomenon extend even further to other countries in Asia?

Let us look at this situation from the following perspective. Western industrial culture has influenced Eastern society since the end of the Qing Dynasty and continues to exert its influence onto Asian contemporary art. However, this should not be viewed as negative. We have much to gain from this outside force, but we also must remember that this is not a one-sided relationship. Western involvement has invigorated the contemporary art scene in Asia and has created a space for creativity and expression, using our own methods and our own voice.

From my experience with contemporary art I have seen its negative emotional effect. Caught between the definitions of Western rationale and insanity, we use these criteria to create our artistic vision. Our art was conceived through Western seed, but now the West needs to come to see what they have sired. The Asian society in China, Japan and Korea is represented in many of the works. But more evident are the differences in the ways our

societies have developed. The difference may be manifested in our attitudes toward our economy and politics, or in our current conditions. But this just gives us a better excuse to look deeper and to understand each other. Over time, this allows us to familiarize ourselves with our similarities and differences.

The name of the exhibition, "Out the Window," describes the moment of looking out at a window. The view up close is limited, but if one looks farther you can see more of the sky over the ocean. Wind blows in through the window; light enters through the window; and it is an opening for us to see each other. What brought us together to organize this exhibition and made our working and collaborating so smooth? It is like the line of a poem that describes looking out at the sea through a window. This is why we chose this title.

This title can also be a response to the Eastern thought that is influenced by the West. History acknowledges the respective influences we have had on each other. This influence is most strongly felt between the Korean and Japanese artists' works. Chinese artists' works are much more related to societal issues. In the history of Chinese contemporary art, it has taken only five years from our acknowledging the West from our Eastern perspective, to the reconfirmation of the concept of "the East." In contrast, we have had fifty years of social experience in building knowledge.

From the founding of the People's Republic of China in 1949 up to the current years, we are able to trace the way in which we have acquired knowledge, and survived in our society. The relationship between the West and the East has moved beyond simplistic definitions like enemies or friends. Instead, we should focus more on our own cultures and lives. Now is the time to think what school of thought we would like to follow, and what lifestyle we would like to pursue.

Art can not save the soul nor can art change reality, but if artists can have a clear vision, art can become a reflection of reality. Will the audience be able to understand? Much like the movie *Matrix* where humans are fighting machines, what exactly is it that we need? Maybe it is just a breath of fresh air when we open the window; as if we were standing on the beach facing the ocean, as if we had no sense of borders, as if we had no history, as if we

had no art.

Note

The Three Kingdoms period starts during the Later Han Dynasty, when the rival warlords fight each other to seek hegemony. Wei, Shu, and Wu are the three kingdoms that were in conflict until, in 264, the Jin Dynasty emerged in place of Wei. Many historians mark 190, when Dong Zhuo burned Luoyang to transfer the capital with the Han emperor Xian, as the beginning of the period, until 280, when Jin defeated Wu to unify the country.

Li Zhenhua (Independent Curator, China)